

日本記者クラブ会報

取材、研鑽、親睦の場として

理事長 若松信重

です。

全国の会員の皆さま、新年おめでとうございます。日本記者クラブも結成されて十四年目、現在のプレスセンタービルへ移転して七年目を迎えております。この十一月には結成十五年目に入るわけです。会員数も千九百名を超え、ことし中には二千人に達しようとしています。全国的なナショナルクラブである日本記者クラブが諸先輩のしかれたレールの



上を走り発展し続けていることはご同慶の至り

日本記者クラブが先輩ジャーナリストの皆さまはもとより、第一線のワーキングプレスの皆さんを含めて取材、研鑽、親睦の場として、さらに国際化の時代にあつてわが国を訪れる国賓、公賓、要人の記者会見を通じて、わが国と諸外国との相互理解に果たしている役割は大きいと存じます。

昨年日本記者クラブが招いたゲストの一人、ポーランドのワレサ連帯委員長が昨年十一月釈放されて自宅に帰ったニュースは、記者クラブにとつても明るいニュースのひとつでした。テレビに映しだされたワレサ議長元気な表情をみて、ホッとされた会員も多かったと存じます。

忙しい年になりそうです。低成長、行財政改革、防衛問題、貿易摩擦問題をはじめとする難問をかかえながら、きびしい国際政局を乗り切っていく日本の進路をあやまらせないようにするため、ジャーナリストの責任はますます重大になってきます。ことしも日本記者クラブは、こうした役割を果たしていただく上で、少しでもお役にたてばと願っています。

なお技術革新の時代にジャーナリストとしてもたち遅れないよう、五十六年夏から開始されましたシリーズ研究会「新技術」は、昨年十回開催しましたがいぜん好評なので、ことしも引き続き開催の予定です。

一月一日現在の会員状況

法人会員	一四三社
基本会員	六二四人
個人会員	一、〇四二人
法人・個人賛助会員	五七社
特別賛助会員	一七二人
名誉会員	七一人
計	二〇〇社 一、九二二人

第155号
1983年
1月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三―二七二二(代)

新春随想

加齢の悦び



平岡敏男

昨年九月に、七十三歳になった私は、明けて数えて七十五になる。元来、前向きというよりも、

後向きの性格のせいであろうか、ひとつ年をとったのが嬉しい。まるで子供のようだ。年をとると、自分の年齢のことを話すのを嫌がるひとがいる。別に、その人の経歴、人格、識見などは、関係はないらしい。しかし、婦人でも、むしろ嬉しそうにご自分の年齢をいうひとがいる。武原はさんなどそのひとりだ。

私の場合、二十代、三十代には、七十歳まで生きられるなどとは夢にも考えなかった。戦中でもあったが、それだけでなく、見かけと違ってそれほど丈夫なからだ

とは、思っていなかったし、強運に恵まれる自信もなかったからだ。

厚生省の昭和五十六年度簡易生命表によると、六十五歳の男の平均余命は、明治二十四—三十一年は一〇・二年であった。昭和五十六年のそれは、一四・五二年で、九十年間に四年半しかのびていない。零歳の平均余命が、この期間に、男が約三十二年、女が三十四年のびて、それぞれ七三・七九歳、七九・一三歳に上っているのとくらべると、伸びの少ないのに驚くほどである。ただし高齢者の数はふえている。

そういう次第で、七十歳の男の平均余命が一・四四年、七十五歳のそれが、八・五五年、七十三歳は、その両方の平均と考えると、私など

も、これからおよそ十年くらいは平均余命のおこぼれにあずかれる勘定になる。といつてもあと十年の寿命が約束されるわけではないし、またあと十年生きなければならぬということではないから

いいが、七十歳を過ぎての一年、一年は健康的には、息せき切りながら高い山を登るようなものである。正直いって気持は、あまり弾まない。それだけに、新たに七合目、八合目に、無事辿りついて、麓の方を眺めるのは格別の楽しみだ。後向きの悦びである。この点、土光敏夫氏のように向き一筋のひとは全く逆である。

根が後向きに出来ていることと関係があるのか、私には、人との係わりが、いちばん強く心に刻みこまれる。故上林暁氏のつぎのことばが、好きで、時に、引用させてもらっている。

「人と人との係わりは、それが只

一度きりのものであっても、終生付きまとい離れないもののように思われるのだった」——「零落者の群」から——

大内兵衛先生は、一九八〇年のメーデーの日に、九十一歳でなくなった。先生は、日本の社会科学者では、河上肇が、一番文章がうまいと書いた。河上以外には、福沢諭吉があるが、この人は、学者のカテゴリーに入るかどうかかわからない、この二人は、自伝を書いたが、どちらも傑作としてベストセラーになったとも書いている。しかし、私は、河上よりも福沢よりも大内先生の文章がうまいと思っている。間口、奥行ともに、人に近づけぬけた見ごとな教養の持主であった先生は、晩年に至るまで、その絢爛たる才筆を縦横に駆使していたようである。大内先生は、昭和三十三年、七十歳になられた記念に「我・人・本」という本を出した。非売品である。はしがきで先生は、こう書いた。

「すべてのもののうちで、私が一番好きなのは人間である。芸

術とか、詩とか、スポーツとかについて特殊な趣味はない。気の知れた友人と人のうわさをするこゝとだけはいつでも楽しい。この雑文も、結局は、この道楽である。ここでは、思うことを思いきってはいってないが、これは人に読んでもらうために書いたからで、まだ何ほどか色気が残っている証拠である」

私は、昭和四十四年に還暦を迎えて、翌年「めぐりあい」という雑文集を出した。大内先生より十年も若い私が、右に引用した大内先生の文章をあとがきのなかに引用させてもらい、非売品にした。すこし生意気で、キザかとも思ったが、売れるような中身でないと思つたせいもある。

いま「めぐりあい」を開いてみて、あらためて、気がついたが、目次三十数項目のうち、三十項目以上は、人間のことを書いている。人物画である。風景も静物もない。「気の知れた友人と人のうわさをするこゝとだけはいつでも楽しい」という点では、完全に先生

と一致する。

私は、毎日新聞社で三十歳台の終わりから、七年半財政・経済担当の論説委員を勤めた。その前には経済部長でもあった。にもかかわらず、理屈めいたことを書くのは、すこぶる苦手であった。今でもそうである。論説委員時代、少々ましといわれた社説は、お門違いのエロ小説排撃の一文だけといつていい。故中島健蔵氏からも、当時、お賞めのことばをいただいた。

還暦から十年経って、昭和五十四年、古稀の記念にやはり雑文集「焔の時灰の時」を出した。この本の第一部「古稀を迎える」のなかに出てくるのは人のことばかりである。故人の追想や弔辞も出てくる。第二部は「再建への道」であつて、いろいろの機会に、社長として喋つたことを収録しているが、「辞表のあとさき」や「書かれる身になつて」という項目に、多くのページを割いて人との係わりあいを、ある程度なまなましく書いている。

今度の「毎日新聞私の五十年」では、故人を二十人ちかくとりあげて

いる。古稀以来の三年間に、多くの先輩、友人を失なっているからだ。そのために、いうなれば私の過去帳のような本になつてしまった。こんな本に、商品的価値があるとは思えない。敢えて学問や芸術とまではいわぬが、スポーツとか飲みもの、食べものなどについてたいのひとは、何か書きたくなるものだが、私の場合は、それがゼロである。

ゴルフは、やることはやる。スコアは問題にならない。私の所属する相模原ゴルフの常連は毎日新聞のOBである後藤弁吉、山田順三、住本利男というところだが、八十歳を超えている後藤、山田両氏のおかげで、四人の平均年齢は七七・五歳である。これが、どこまで伸びるかが、厚生省の平均余命より、興味があり、楽しみである。ハンディなど、どうでもいいのだ。ゴルフアールにとっては邪道であろう。

曾野綾子さんは、四十歳の時「戒老録」をかいてくれた。十年ほど前である。ベストセラーになった。中老年のひとには、一読を勧めたい本である。

この美しい才女は、本のなかで、こう書いている。「早く死ぬつもりが、長く生きすぎて一文なしになつて余生を送らねばならぬと困る、という口実のもとに、爪に火をともしようにして、儉約して暮らし、ついに自分の貯えた金の恩恵をまったくこうむらずに死んでいく老人がいかにか多いことか。それは滑稽である、と私は、今、老年の自分に対して、はつきり宣言しておこうと思う。九十まで生きるつもりで、それを使いきるように、計算をして、あとは、私の知つたことではない。それだけ生きれば、あとは道へほっぽり出されてもいいではないか」

曾野さんは、さすがにいいことをいつている。しかし、同時に、変なこともいつていると感じるのは、自分が、年をとつたおかげかもしれない。

略歴

明治四十二年 北海道生まれ。昭和七年 東京大学経済学部卒。同年毎日新聞社入社。経済部長、論説委員、ロンドン支局長、総務局長、企画調査局長を経て、昭和三十八年取締役経理局長。西日本社代表・常務取締役のあと昭和四十六年監査役。五十一年毎日新聞社社長。五十五年から会長。

とっておきの話

私のボン特派員時代

——いまも懐しいドイツ人気質——

藤本有典

ドイツは連合軍の占領下で電話器や電話線が不足していることはよくわかるが、それにしても普通では申し込んでから一〜二か月かかるという。

これではどうにもならない。ある日、

われわれの世話をしてくれる情報新聞局（通称プレス・アムト）に遊びにいった、グチをこぼしたら、そのお役人が、「何とかするから明日来い」という。翌日そのお役人のところに行ったら、公式の役所の封筒にいられた一枚の文章をくれた。

中身を読んでみると、

「この男は友邦日本から来た唯一の特派員で、電話はこの男にとって仕事上必要欠くべからざるものである。至急つけるよう便宜を図ってもらいたい」

とあり、局次長のサインがしてあった。有難くいただき、早速それを電話局に届けたら、驚いたことに翌日には仕事にきて電話をとりつけてくれた。官僚上位のこの国の国情にも驚いたが、「仕事上必要欠くべからざるもの」としてせっかく手にいれた電話も、当時の私のドイツ語の力では、ドイツ人に直接電話で取

材したり、用を足したりはなかなかできない。最初のうちは電話をかける相手は日本大使館くらいのもので、ある程度電話でドイツ人にも用が足せるようになるには、二〜三か月はかかったろう。

“赤鉛筆”はない

特派員の毎日の仕事は、少なくとも三〜四種類の現地の新聞に目を通すことだが、そのうち重要な記事や箇所にはあとでみるために、印をつけて切り抜いておく。そのための「赤鉛筆」が絶対必要なので、文房具屋に飛び込んで、ドイツ語で赤鉛筆 Rot Bleistift をくれ、というところ、六十歳がらみの主人は「そんなものは絶対ない」という。見ればショーケースの中にちゃんとあるのだが、それこそ絶対に出してくれない。そのうちに主人の娘さんらしい人が「赤鉛筆」を出してくれて、「これで良いのですか」という。当方はダンケ、ダンケを連発しながらお金を払うと、例のご主人いわく「これは Rot Stift であって絶対に Rot Bleistift ではない」。そして、急に相好をくずしてニコニコと笑った。

あとで、よく考えてみたら、日本で

「とっておきの話」を、といわれても、ごく平凡な記者で、しかも、比較的若くから行政畑にはいつてしまった私には、とくに記者としての「とっておきの話」もない。そこで、他人にいうには恥しいような失敗談をも含めて、私が戦後始めて西ドイツ・ボンに特派員で行った時のことを書いてみよう。誰だって自分の失敗を声高に話したくはないだろうから、これも「とっておきの話」のうちにはいるのかもしれない。

ボンまで五十時間

私が戦後、初のドイツ特派員になったのは一九五二年七月（一九五一年九月、サンフランシスコ条約締結の翌年）。今なら北極回りで二十時間もあれ

ば十分なのに、当時は南回り、しかも少し飛んでは給油のために一〜二時間を要すので、東京からフランクフルトまでちょうど四十八時間、それから列車でボンまで二時間、現在の倍の五十時間はかかった。

とにかく私が着任した時は、日本大使館がケルンのホテルの仮住いから、ボンのヴェーヌスベルクという丘の住宅のひとつに引っ越してから一週間、大使館員といっても寺岡臨時大使以下五人という小世帯、館員の奥さん方三人が、前日にボンについた、という具合で、ボンでは大使館員を除けば日本人は私がたった一人。毎日、新聞の案内広告をみては下宿探しに歩き回って、足にマメができたりした。

困ったのは電話がなかなか取れなかったこと。当時敗戦後日もたっていないし、

は赤鉛筆で通るが、もともと鉛筆の芯は鉛(Bi)で作ったもので黒いものだ。だから赤い「鉛筆」は絶対にない、というのが、この頑固な老人のドイツ人らしい理くつで、私も恐れ入った次第。

「ソーセージ」と「オツパイ」

ドイツといえば、ソーセージを思い出すのだが、いわゆる一流のレストランはフランス料理が売り物で、庶民の食べるソーセージはほとんど食べられないといっている。従ってソーセー

ジ(ドイツ語では the Wurst 複数では die Würste)を食べたければ二流の店に行く。

私のよく行く「二流」の店で、ある日ソーセージを注文した。すると顔見知りのボーイがニヤニヤ笑いながら、「私は残念ながら持ち合わせがございません。あちらのご婦人に頼んでください」と、少し離れた席の豊かな胸をした女のお客の方に視線を向けていう。

何故かと思ったら、私の発音は *brisa* だったようで、*brisa* は胸、つまり「オツパイ」のこと。あわてて、Bの発音をWに直したら、ボーイ君、得たりとほくそ笑



まだJALが運行されておらず、SAS(スカンジナビア航空)で羽田を立つ(一九五二年)

んでソーセージを持ってきてくれた。日本人にとって はF、V、Wなどの発音は非常にむづかしい。HやBのように唇をくっつけて発音するか、上の前歯を下唇につけて音を出すか、だけの差だけのこ

とだが、これがちゃんとできればドイツ語もやっと一人前。

ついでの話だが、文芸春秋の元社長、佐佐木茂索さんご夫妻がボンにこられた時、三日間くらい、お相手したが、奥さんが「どのレストランやホテルでもソーセージが食べられない(一流のホテルやレストランだから)せつかくドイツに来たのだから是非ソーセージを」といわれるので、さきに話した二流レストランに行つて、「この店の持っている全種類のソーセージを少しずつ出してくれ」と頼んだら、何と銀盆の上に三十二種類のそれぞれ味の異なったソーセージを出してくれた。

「スターリン死亡」を聴く

ソ連のスターリン首相が亡くなったのは一九五三年三月五日。その頃には私のドイツ語もだいぶ上達していたと思う。ラジオのニュースの時間はなるべく聞くようにしていたが、この日もたまたまラジオ・ニュースを聞いていた(当時はもちろんテレビはまだなかった)。すると「スターリン死亡」のニュースが飛び込んできた。そしてその後の人事予想など、多少のコメントをしゃべっているようだ。しかし残念ながら、私のドイツ語

力では「完全」には聞きとれない。「スターリン死亡」に関するコメントを一刻も早く本社に打電したいのだが、私の頭に「もしも私の聞き違いだったら」という懸念が沸いた。そこで早速、大使館に電話をしたらラジオを聞いていなかったのだから、とこのこと。ところが当時私以外にもう一人「日本人」の記者がいた。この人は南条通信員という名で、時々毎日新聞に記事を送っていた人。個人的な理由で日本国籍をはなれ、すでに十八年もドイツに住み、戦争中は収容所にはいなかった、という人。この人は足で取材することはほとんどないが、ラジオはよく聞いている、と知っていたので、この南条氏に電話をかけて確かめたところ、この親切な人は、「確かだ」といい、コメントの内容まで正確に教えてくれた。お陰で、あとで本社から「ボンの反響記事は早かった」とおほめのことばをもらった、と記憶する。その後も南条通信員にはずいぶん世話になったことを感謝とともに付記する。

略歴 大正三年山口県生まれ。六八歳。東京大学文学部独文学科卒。昭和十三年同盟通信入社。二十三年時事通信社へ。政治、整理、写真各部長、ボン、ハンブルグ各特派員を歴任。四十六年取締役役に就任し、第一編集局長、事業本部長、企画室長を務める。四十九年七月から五十四年十二月まで日本記者クラブ事務局長。

ロッキード裁判

「直角」「仰角」「角見鶏」……。中曽根政権を支える田中角栄元首相は、政治の場でこそ劣えぬ力を見せつけたが、さて今年の正月、そう安穩と過ごせたかどうか。ロッキード裁判が一月二十六日には論告求刑、そして秋にも判決が予想されるからだ。

ロッキード裁判は、五億円ワイロが太平洋を渡り、時の総理大臣に渡ったかどうかを裁く壮大な「法廷ドラマ」である。

東京地裁七〇一号法廷を舞台に、五十二年の初公判から六年。膨大な量のスクラップブックや法廷ノートを読み返してみると、ロッキードは「実体的真実の発見」を目的とする刑事裁判とはなにかを勉強する「教科書」でもあったという思いがする。

田中被告の顔色が冴えなくなつたのは、検事調書の内容が次々と法廷で明らかになった五十四年秋

からだつたらうか。

ロッキードでは、調書と法廷供述がごとく食い違ひのが特徴。法廷で調書否定の場面がくると、検事はきまつて「取り調べのときはこう言つてたんじゃないですか」と、調書を引用して追及する。このときの検事は思わぬ程に傍聴席をチラリ。記者団はボールペンを握りしめ、ぐつ

国民はどのような教訓を

遠山 観

(サンケイ新聞社社会部)

と身を乗り出す。

▲田中総理は(全日空へのトライスター売り込みの尽力依頼に)「よしや、よしや」と快く引き受けてくれました▼(元丸紅会長・松山広被告の調書)▲現金入りの段ボール箱を抱えて(田中邸の)本宅の玄関をくぐり、廊下を伝って違い棚のある座敷に運びました▼(元首相秘書官・榎本敏夫被告の調書) e t c, e t

c...

そして、田中弁護団が「現金授受否定を証明するウルトラC」と華々しく打ち出した「榎本アリバイ」も、あの榎本三恵子さんの「ハチの一刺し証言」ですっかり色あせてしまった。最後の論戦となった昨年の「首相の職務権限」では、検察側の方にゆとりすら感じられたものだ。

「総理大臣在任中の職務執行を顧みる

とき、俯仰天地に愧じるものは何一つない」「わかつたの角さん」などとヤエされる私だが、ヤブから棒に(五億円話)「わかつた」などと即答するほど軽率でも、単純でもない」

五十二年一月二十七日、初公判の罪状認否で、田中被告が涙ながらに起訴事実を全面否認したときのセリフである。

被告人は判決まで無罪の推定をうける。これは刑事裁判の大原則である。しかし、これまで法廷に顕出さ

れた証拠をみるかぎり、すべては田中被告不利の方向を示している。初公判での「涙の陳述」が空々しく聴こえてもくるのだ。

ロッキードと戦後民主主義。このテーマを考えると、きまつて思いつく判決がある。同じ航空機売り込みをめぐる政界工作の中で起きた「日商岩井事件」の東京地裁判決(五十五年七月)だ。このとき、

半谷恭一裁判長は「腐敗をおおひ隠し、適正な処置がとられなければ民主主義は危殆に瀕する。事件からどのような教訓を引き出すかは、今後の国民の課題だ」と言い切った。

「田中判決」の日、「首相の犯罪」を裁く岡田光了裁判長は、どんなセリフで法廷ドラマの幕を閉じるのだらうか。その日は田中被告はもとより、国民にとっても長く、やりきれない一日になることだらう。

ワーキングプレス

東京支社訪問

南日本新聞

「あなたの支社訪問の取材(十二月二日)に合わせ、てくれた訳じゃないんだろ、うけど、ここ三、四日もの、すごく忙しくてネ……」と、破顔一笑の東京支社次長兼報道部長・佐伯悟会員。

報道部は佐伯さんを含め三人。かつて東京支社は若い記者の「研修」の場も兼ねたが、今は「実戦配備」ということで副部長・高柳毅会員(42歳)、同、二階堂圭一会員(39歳)といずれもベテラン。二階堂記者が硬派もの、高柳記者が軟派ものを主に受持っている。

中曽根内閣には地元鹿児島県から山中貞則氏が通産相で入閣、二階堂進氏も幹事長に再任された。

「組閣の十一月二十六日は朝からずっと官邸へつめて、夜十一時半過ぎにやっと二人に会い談話を取ることにできました」と二階堂さん。

本社へファックスで送った原稿で満杯のダンボール箱をさぐり、取材手帳を見ながら、「ある日の地方紙記者の取材メニューを紹介しましよ」と十一月三十日の活動を再現してくれた。

まず早朝、肉用牛振興対策推進全国協議会に出席のため上京の鎌田要人鹿児島県知事の談話を取るため、宿泊先の練馬へ。車に同乗して都心の会議場に向かうが、朝、東京を襲っ

ベテラン中心の

実戦配備

た「冬のあらし」で、車が立往生。

「知事は会議に遅れたら大変と、急いで地下鉄に乗り換えただけで、知事が地下鉄に乗るなんて珍しいですからね。早速夕刊用の記事にしました」

その後全国会議のフォーローが四件。肉用牛会議、全国過疎地域振興連盟会議、テクノポリス建設促進連

絡協議会、南九州畑作営農改善資金融通臨時措置法会議。

「いかにも地方紙っぽい取材ですよ。でもこういうものこそほくらが真剣に追いかけてきなかならないんですよ」

会議フォーローの合い間に、種子島出身の若島津が、後援会長山中氏の通産相就任祝いにつけたので、これも取材。文字通りフル回転の日だったようだ。

ところで、第二次国鉄赤字ローカル線廃止案で、鹿児島県内を走る五四二・五キロのうち二三三・九キロ、約四三%が廃止対象になっているのだそうだ。

「地元としては深刻ですよ。利用促進運動で成功している千葉の木原線の取材に、これからかかろうと思っ

ているところなんです」と高柳さん。

ローカル交通システムと地域住民・地域社会の問題を、どう考えていくべきなのか、地元紙としてその材料も提供していかねければならない。

南日本新聞では朝刊で三本の漫画

を連載している。「なんにも漫評」、「ヤゴロウ君」、「まんが示現流」で、すべて東京からファックスで本社へ送られている。

「だから一番新しいニュースをもとに描いてもらえるんですよ。デッキカイ事件があればここで描き直してもらえますし……」と佐伯さんは自分のデスクの後ろにあるファックスを指差す。現在支社は入田良男支社長のもとに編集部のほか営業八人、庶務一人の計十三人。とりわけベテラン記者三人のチームワークは堅い。

(長谷川)



左から高柳さん、佐伯さん、二階堂さん

『会報アンケート』の結果

よく読まれている『会報』

昨年十一月に実施した『会報アンケート』の結果は別表の通りです。回答総数四三五で回答率は二二・八％でした。なお会報の編集、企画等について寄せられたご意見は次の通りです。アンケート結果は、会報への関心の高さが高関読性を示しています。

(講演記録)

▽講演会などなかなか出席できません。引き続き掲載を▽シリーズ研究会の内容掲載大変役に立っています。▽番組企画(テレビ)の貴重な資料として大いに活用しています。▽長文になってもぜひ掲載した方がよい。▽これぞという研究会、講演会など「教養」に資するものはどしどし▽出来るだけ詳しく掲載してください。▽実際に出席した時でも参考資料になり、所用などでやむを得ず、欠席した時は、記録で内容を知ることが出来助かります。▽新技術シリーズの講演内容遅れても必ず掲載を▽地方在住者にとっては格別有効な情報源となっています。ファイル用の穴

をあけてはどうか▽講演内容が収録されているので保存しています。▽地方にいる者にとっては、講演内容は最高、最良質の情報です。▽よくまとまっています。

▽長文は読むのに苦労なので出来るだけ簡潔に▽概要またはサワリの部分の掲載で十分と思う▽研究会の内容などは長いので、関心のうすいものは途中でやめてしまうことも多い▽シリーズ研究会の内容は出版してはどうか。

(とっておきの話)

▽会員諸氏の貴重な体験、取材ぶりなど大変勉強になり、興味深く読ませていただいております。

(※月のクラブゲスト)

▽記者会見の内容をもっと紹介してほしい▽ゲストの発言の要約紹介を写真つきでマメに掲載されたし▽拡充を希望します▽地方会員でクラブ会合に出席出来ない者のため、出来るだけ会合の報告記事をふやしてほしい▽開催時の裏話や情景描写を。

(東京支社訪問)

▽愛読しています。これからも続けてください▽外国新聞、放送、通信社のものは興味はあるが、地方紙の場合はつまらない▽テレビの地方局も訪問されたし。

(プロフィール、ビジョンボックス)

▽知人が「こうなのか」「定年になったか」などを知ることが出来楽しみにしております。人間はウワサ話が好きなもの▽まったく不要。

(提案)

▽OB記者と現役記者の対談を、サツ回り記者、司法記者、文化部記者などの今昔が引き出せればおもしろいのではないかと「地方の時代」に

第36回会報委員会

昭和57年12月1日(水)
日本記者クラブ大会議室

十一月に行った『会報アンケート』の結果について意見交換した後、会報での扱い方について協議した。

出席 小林委員長、桂、斎藤、東郷、中沢の各委員。

第96回企画委員会

昭和57年12月13日(月)
日本記者クラブ大会議室

前月の行事報告の後、一月のクラブゲスト候補について意見を交換した。

その結果、国内ゲストとしては中曽根康弘総理、秦野章法相、安倍晋太郎外相、竹下登蔵相、瀬戸山三男文相、金子岩三農水相、山中貞則通産相、斎藤邦吉行管庁長官、谷川和穂防衛庁長官を、外国人ゲストとしてはトルドー・カナダ首相、マハティール・マレーシア首相、マンスフィールド駐日米大使を、それぞれ招くよう折衝することにした。

また、一月に來日予定のハーバード大学ロニア研究センターのアダム・ウラム所長を招き、ソ連問題の研究会を行うことを決めた。

アンケートの結果 (昭和57年11月10日実施)

回答総数 435名
回答率 22.8%

	よく読む	時々読む	ほとんど読まない	無回答
研究会の紹介ス トリー・おラ ベズ記者社紹 ブ会食の支合 ンリ会食の支合 ロシ昼の京ジョ フ演録の先東会 フ講記と先東会 ピブ	257名(59.1)% 229(52.6) 211(48.5) 238(54.7) 104(24.2) 93(21.4) 49(11.3) 67(15.4) 137(31.5)	137名(31.5)% 181(41.6) 181(41.6) 130(29.9) 216(49.6) 175(40.2) 166(38.2) 201(46.2) 185(42.5)	21名(4.8)% 19(4.4) 21(4.8) 28(6.4) 88(20.7) 141(32.4) 192(44.1) 145(33.3) 98(22.5)	20名(4.6)% 6(1.4) 22(5.1) 39(9.0) 27(5.5) 26(6.0) 28(6.4) 22(5.1) 15(3.5)
(平均)	(35.4)	(40.1)	(19.3)	(5.2)

ついで座談会を。テーマはいくらでもあると思うが▽年長会員の人生論の紹介を▽諸先輩の「今だから話そう」的な話を▽年二回程度、保存が出来る50ページ程の特集版を(その都度テーマを選び会員の原稿を掲載)▽極力、短信を。人の動静や消息、クラブルームでの苦情なども▽出来ればファイル用の穴をあけたらどうか▽クラブのレストラン、会議室、バーの利用案内を時々掲載してほしい▽外人記者への依頼原稿で、日本のマスコミ評の連載を▽前の月の内外のマスコミ界の主要な動き、話題などを日誌風に▽有名記者の随想を▽現場記者やデスククラスの人達の発言、放言、エッセイを▽ページ数を増やせませんか。「交流欄」(会員相互の)などをつくれればやわらかく楽しいページになると思うが。

(その他)

▽従来通りで結構です▽毎号楽しく読んでいます▽全般的に結構な内容だと思います▽丁寧によく編集されています▽大体満足しています▽OBにとつては貴重な情報源です▽企画、取材に積極性がみられます▽非

常に楽しい。ご苦心に感謝す▽最近編集がキメ細かになりました。読ませようとの姿勢も、やわらかい企画に読みとれます▽都外にいるとなかなかクラブへ行けないので、会報は有益で、楽しみながら読ませていただいております▽興味深く拝見しています。この調子が継続することを望みます▽現在の紙面づくりに満足していません▽現在の編集、企画を高く評価する▽毎号楽しく読んでいますが、もう少し読み易い組み方にしてほしい▽食欲をそそるような記事がほしい。ややマンネリになっていませんか▽芸がないと思います。今号(十一月号)などはレイアウトにも工夫がありよくなっていますが▽もう少し紙面にピリッとした批判精神が横溢しているものをもとめるのは無理な注文でしょうか。ハツとしたり、ドキリとするような反権力の姿勢がうかがえないのは残念▽面白く思うときとそうでない時もあります。一般的に「新聞」的編集にすぎている。もっと映像時代の感覚的な編集を。

「昭和57年予想アンケート」の結果については、第二問の新規住宅着工戸数は建設省統計で十月までですすでに一〇四万五、七四五戸となっており、一〇〇万戸を超えていることを確認。第三問の米国の対日貿易赤字も米商務省統計で一五〇億三、四〇〇万ドルとなっており、一五〇億ドルを超えたと判定した。

一月二十日(木)の新年互礼会の席上実施する「昭和58年予想アンケート」の問題一〇問を決定した。

出席 本島、石丸、森本、太田、広瀬、平田、米、牧野、高野、梅本、藤川、泉田、今井、鈴木、永町、ヒルンチャー、今、村野の各委員。

第65回会員資格委員会

昭57年12月13日(月)
日本記者クラブ小会議室

一月一日付での入退会を審議し、理事会へ答申した。

「個人D会員入会申し込み書」のフォームについて検討。入会を希望する理由を明記してもらう欄を新たに設けることにした。

出席 加藤委員長。伊藤、赤松、滝沢、鈴木、亀山、玉木、山田、長竹の各委員。

先月のクラブゲスト

◇寺谷弘壬青山学院大教授

講師、追及される！

チエルネンコーアンドロポフの確執など、クレムリンの権力闘争を、ダイヤモンド盗難事件などのエピソードをつなぎ合わせて語る。その情報の確度を現役記者に何度も追及される場面も。佐藤経明教授(11月30日)とは対照的なソ連研究者……。

(研究会 2日(木) 司会 梅本昭企画委員 出席 三九名)

◇高橋元公取委員長

独禁法の枠内で十分



「就任して今日で十週と一日です」と委員長。司会者に「勉強家で思想家でもある」と紹介されるだけあって、低成長で困難の多い経済状況下での、独禁法の適用原則と運用について、

きわめて明解で整理された講演内容。通産省が検討中の構造不況対策についての質問には「外国でも競争制限をしている国は少ない」として、不況業種救済のための構造改善は「現行独禁法の枠内で可能である」との立場を示した。(3日(金) 昼食会 司会 広瀬一郎企画委員 出席 四五名)

◇米飼料穀物ミッション

お百姓さんは政治的！

米飼料穀物協会(U.S. Feed Grains Council)は、トウモロコシ、グレインソルガム、大麦、ライ麦、オーツ麦の生産者とアグリビジネス(種子会社、肥料・農薬・農機具会社など)により構成され、研究開発、海外市場開発、広報・情報活動を行っている。今回のミッションはアジア市場の研究、視察のためのもの。団長の格のニューリン氏(バイオニア・ハイ・ブリッド副社長)以外は、米国の現役のお百姓さん。ただし、所有面積は一番少ない人で五三〇エーカーで、最大規模の人は一、八〇〇エーカーとか。

牛肉の輸入を増やせば飼料は減るが、と質問されても、「一番の市場は国内のフィード・ロットだが、日本は最大の輸出先なのでよい製品を提供していきたい」となかなか巧妙。規模の違いはあっても、やはり、お百姓さんはどこでもな

かなか政治的……

(6日(月) 記者会見 司会 広瀬一郎企画委員 通訳 岩倉嘉代子 出席 二〇名)

◇ニール・S・カリー豪州大使

お弁当にしてください

カリー大使の希望で、幕の内弁当での昼食会。講和条約締結前の代表部時代に東京勤務。その頃東京で結婚し、三年間の在動中に三児誕生。「日本の生産性の高さにあやかり二子と三子は双子なので、念のため……」と笑わす。

十月に新大使として着任。日豪の通商協定が成立して二十五年、「銀婚式です」という。

現在、豪州にとって日本が一番の貿易相手国となり、日本にとっても産油国を除けば米国に次いで二番目。日本が加工貿易立国を、豪州が欧州経済からの自立を目ざした二十五年前の政策決定は、画期的成果を示している。しかし、両国は望遠鏡を違う方向からのぞき合っているようだ、とも指摘する。(7日(火) 昼食会 司会 笠置正明事務局長 通訳 村松増美 出席 四四名)



◇宋之光中国大使

対日政策の重視強調

二月に着任。わずか十か月ならず四七都道府県の半分をすでに訪問したという。一九一六年、広東省生まれ。

中日関係を中心に約五〇分講演した。

七二年の国交正常化以降の友好関係の発展ぶりを要領よく整理。七二年の貿易総額(往復)一〇億ドルが、八一年には一〇〇億ドル以上と十倍増。人物往来も七二年と昨年とでは、日本側が十七倍、中国側二十倍増……。

胡耀邦、趙紫陽両氏の発言を引用して、中国の対日重視政策を強調することをお忘れなさい。

中ソ和解についての質問には、「中ソ関係悪化の因は、ソ連が覇権主義政策を推進したのに対し、中国がこれに反対したところにある。私たちはソ連と談判している。ソ連のこれまでの覇権主義政策を、実際の行動をもって止めるよう交渉している」(15日(水) 昼食会 司会 高野洋企画委員 通訳 唐家璇一等書記官 出席 一一〇名)



紹介合会

1日▽日本プレスセンター創立十周年記念夕食会(前田雄二会員) 2日▽インレーン防衛を考える会(テレビ朝日吉岡晋也会員) 3日▽新年号企画『二十一世紀を探る』座談会—宮崎輝旭化成社長、下河辺淳総合開発機構理事長、平松守彦大分県知事、赤沢璋一富士通副会長(西日本新藤吉保徳会員) 4日▽社友会パーティー(道新 岡信雄会員) 5日▽都市問題研究会(木原啓吉会員) 6日▽朝日ボールルームダンスクラブパーティー(朝日新 木村明生会員) 7日▽日本エッセイストクラブ忘年会(殿木圭一会員) 8日▽NSNP会—衛星中継担当記者の勉強会(NHK 若松顕治会員) 9日▽広告代理店パーティー(テレビ東京 中川順会員) 10日▽徳島クラブ理事会(徳島新 谷田匡会員) 11日▽新年特集座談会『83年・選挙と国民の選択』—内田健三法政大学教授、堀江湛慶応大学教授、富田信男明治大学教授(山陽新 藤岡進会員) 12日▽在京四社工務局長会(協会 桂敬一会員) 13日▽JNN報道部長会懇親会(TBS 太田浩会員) 14日▽対談—草柳大蔵氏と広告主(朝日新 広橋敬栄会員) 15日▽広告委員会下部機構年末合同懇親会(協会 権田萬治会員) 16日▽放送番組向上委員会(工藤弥市会員) 17日▽報知釣り教室(報知新 鮎田大造会員) 18日▽第九回ふるさと東京まつり写真コンクール表彰式(東タイ 徳間康快会員) 19日▽土曜会論説責任者会議(岩手日報 藤原浩会員) 20日▽民放合同忘年懇親会(TVK 田代昌史会員) 21日▽国際連合年末レセプション(国連広報センター デビッド・エクスレイ会員) 22日▽21世紀会議(愛媛新堀定省会員) 23日▽毎日書道会評議委員会(毎日 平岡敏男会員) 24日▽橋口正記者の前途を祝う会(毎日 黒川将光会員) 25日▽ボン会—曾野元大使と当時ボン在勤のプレス、各省関係者の集まり(サンケイ 馬淵良俊会員) 26日▽対談—中林貞男日生協会長と佐々波楊子慶応大学教授(日本農業 新井勝会員) 27日▽座談会—尾島雄一水産庁次長と漁業会社代表(水産経済 鳥海興士会員) 28日▽二火会(日本農業 木村睦会員) 29日▽座談会—海外青年協力隊員と水産業関係者(水産経済 鳥海興士会員) 30日▽日経・金研究会パーティー(立花明生会員) 31日▽十七社会(東奥日報 柿木原政則会員) 1日▽情報研究会懇親パーティー(共同 西崎哲郎会員) 2日▽マスコミ青山会(NHK 山室英夫会員) 3日▽中・長期技術開発課題に関する個別懇談会(協会 村上孝止会員) 4日▽公取協東北地区協例会(河北沼田潔会員) 5日▽保利会—政治部記者と代議士で故保利氏を偲ぶ会(時事 沖野剛会員) 6日▽関東U四局会議(TVK 田代昌史会員) 7日▽記者忘年会(帝人 小林陣雄会員) 8日▽車社会研究会(中日 茂野豊次会員) (十二月の主な会合)

◇竹久みち騒動
「13日(月)午後、司法記者クラブ主催で竹久みちの会見をしたので」と幹事から電話。記者会見室からの生中継の準備、混乱を回避するため、彼女の到着時刻、使用エレベーター、昼食などを、弁護士、幹事と相談。
当日、朝、幹事から「昨夜、入院」。



▼パートタイム
翻訳記者求む
有力新聞に永年、記者として勤務した経験があり英語が堪能な方で、一月中旬から週一回、オーストラリア大使館で午前九時から夕方まで仕事の出来る人を求めています。
ご希望の方は至急電話(四五三)〇二五で、詳細を確認のうえ、書面でお申し込みください。なお、募集は一人です。ご連絡をいただいた時点で、すでに決定している場合もあるかもしれませんが、その際はご容赦ください。
オーストラリア大使館
広報部 武田吉朗

大軒杯、村上五段に

●囲碁同好会 ●暮れもおし詰まった十二月二十五日(土)、第一回の大軒杯争奪囲碁大会が行われた。二五名の参加者が三クラスにわかれ、まずクラス別の順位戦を展開、Aクラス村上孝止五段(協会)、Bクラス菊地俊朗三段(信毎)、Cクラス後藤光祥四段(ILO)がそれぞれ一位となった。三者で決勝トーナメントを争った結果、村上五段が第一回大軒杯を獲得した。(詳細は次号)

昭和58年度「日本記者クラブ賞」の

候補者を二推薦ください

◇取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、候補としてご推薦ください。

◇本賞はいわゆる「特ダネ賞」ではありません。候補者の活動の時期、期間を問わず、ジャーナリストの優れた典型を示す事績、人物が評価されるものです。

◇当クラブ会員および法人会会員の社員すべてが候補有資格者です。他紙他社のジャーナリストの方でも積極的にご推薦ください。

◇受賞者は昭和58年度のクラブ通常総会の席上で顕彰され、名誉会員となっております。

◇これまでの受賞者は、長崎新聞 松浦直治氏(49年度)、東京放送 古谷綱正氏(50年度)、毎日新聞 松岡英夫氏と日本テレビ 池松俊雄氏(51年度)、朝日イブニング 芝均平氏と日本放送協会 磯村尚徳氏(52年度)、朝日新聞 松山幸雄氏(53年度)、熊本日日新聞 岩下雄二氏(54年度)、朝日新聞 正田桂一郎氏(55年度)、読売新聞 村尾清一氏(56年度)、東京新聞 須田栄氏(57年度)です。

◇推薦手続きなど詳細については、事務局へお問い合わせください。

.....
 会食時のレストラン

テーブル予約は正午と午後一時に

クラブレストランのテーブル予約を、正午または午後一時の二度の時刻に限定させていただきますので、会員の皆さまのご協力をお願いいたします。それとともに、テーブル予約をされていても、ご連絡のないまま二十分経過した場合は、他の会員にご利用いただくこととさせていただきますので、ご注意ください。今回の措置はクラブレストランの混雑を緩和させ、出来るだけ効率よくご利用いただくためのものです。

このところ会員の皆さんのクラブレストランの利用が増え、昼食時は予約がないと、お待ちいただくこともしばしばです。そこでやむをえず前記の措置をとらせていただくことにいたしました。それに加え、和定食もラウンジ側のスナックテーブルで召しあがれるようにいたします。スパゲッティ、サンドウィッチ、ピラフ、カレーライス類は従来同様、スナックテーブルでおとりいただけます。

会員の著書(ご惠贈いただきました)

生き方がわかる経済読本 今 静行
 毎日新聞 私の五十年 平岡 敏男

クラブ訪問者

11月15日/シャムスール・ライマン(ダイニク・パン
 グラ編集長 アジア新聞財団三菱賞受賞者) 11月29日
 /クリストファー・ポンド(ミズリー州知事)

「事務局人事」▽課長とする 岩崎 玄道

一月の行事

17日(月) 午後0時15分~1時 トルドーカナ
 ダ首相記者会見 プレスセンターホール(10階)

20日(木) 午後5時30分~7時30分 新年互礼会
 員懇親会 プレスセンターホール(10階)

26日(水) 午後2時~4時 シリーズ研究会『新
 技術』XVI 米谷美久オリンパス光学
 研究開発本部カメラ開発部長 クラブ
 記者会見室

新年あけましておめでとうございます。
 恒例の新年会員懇親会は右記の通りです。席上
 57年予想アンケートの結果発表および表彰、な
 らびに58年予想アンケートを実施するほか、毎
 年の福引きを行います。多数ご出席くださるよう
 お待ちいたします。 事務局一同

会報委員長 小林淳宏

委員 桂敬一 斎藤吉史 東郷茂彦 中沢道明
 連絡 長谷川(事務局) 〇三―五〇三―二七二二